

紹介

◎圖書

●近代小説史

文學博士 藤岡作太郎著

か若しくは周は新たにその地方の形勢に随つて助法を創めたとせなければならぬが、氏は恐らく第一の解釋を暗に豫想せられたのであらう。若しそうとすれば周人の詩に特に公田など歌つてあるのが解釋し難いでなからうか。余輩は公田の性質及助法と八家との關係は今少し別の方面から研究する必要がなからうかと思ふ。

氏は更に進んで孟子にある宅地分配の事及周禮の土地制度及山澤の制度に就て研究せられたのであるが、周禮の如きは氏も一種の理想案として居らるるやうであるから必しも深究する必要がない。只其中公家の二畝半分授説、後溪の儒者の爰土易居説の批判の如きは頗る興味ある研究である。要之氏は確實なる根據の上に立ちて一步／＼紛糾せる、諸説を明確に批判しつゝ自己の説を主張せらるゝ態度は敬服の外ない。

東圃遺稿第四卷として出版せられしもの、藤岡博士遺稿の編纂は本巻を以て其完成を見しものなり。本書は既刊の三巻と同じく博士が大學に於ける講義を、學生の筆記と博士の手控の習書とによりて編輯し、更に藤井文學博士の校閲を経たるものなり。

本書總論以下を、假名草紙の時代、元祿時代、安永天明時代、文化文政時代の四編とし、各編夫れ夫れの時代風尚、著作の種類、作者の傳記等を叙章に分ち記述せり。總論、江戸時代の風尚と時代の分割に於ては、徳川時代と平安朝時代とを比較し、前者を尚武の時代、後者を文弱の時代として平安朝の趣味嗜好が徳川時代の夫れに變じ來る徑路を概言し、或は徳川時代の思想界に最も勢力ありしものは數百年の陶冶を経て發達し來りし不文の倫理なる武士道なりしことを論じ、又徳川時代文化が上下に普及することば言へ文學が多數の無趣味の讀者を相手としたるため平安朝の夫れに比して作品の高下に差異ありし、或は江戸時代の調度が時世を談ずることを禁じたるため、事を近古中古に假託する風を生じ爲め

に歴史小説の隆盛を見るに至りし事等を論ずる所博士の識見を窺ふべし。各論に於ては、元和假武と書籍の刊行、萬治寛文頃に於ける假名草紙の全盛、或は元祿文藝が英國エリザベス朝文藝に比較せらるべきこと、元祿文學と歌舞妓との關係、又八文字屋本、實録、洒落本、讀本、赤本、青本、合卷、人情本等に至るまで諸種小説本の出版を記し或は其等の梗概を叙し、作者に就て西郷、京師、馬琴、一九、三馬等には特に筆を立て、之れを説き、其他各時代に出版せられた神道、教訓的著作、軍書、名所記等を併せ叙して、此等著作と其時代の思想界との關係に説き及ぼすところ、著者の周匝なる用意を窺ふべく、又隨所に美術、殊に繪畫に例をとりて評論するところ故博士の師を徳ぶべく兼ねて又遺稿編者の苦心を見るべきものなり(東京日本橋區一丁目大倉書店發行價二、五〇)(西田)

●文學に現はれたる我が國民思想の研究 武士文學の時代

津田左右吉著

既刊「貴族文學の時代」の續稿にして、菊版六百四十八頁、次で上梓せらるべき「平民文學の時代」と相俟つて完成すべしといふ。本書は之を三編に分ち、第一編「武士文學の前期」は承久頃より興國正平頃までの約百五十年間なりとし、第一章「文化の大勢」に於ては、貴族文化衰へ、民間文化未だ發達せざれども、貴族と平民との(世界は雙方より多少相接近したりが、此時代の文化の中心は却て

寺院及僧徒にありとし、第二章「文學の概観、上」(擬古文學)に於ては、和歌、連歌、擬古物語を概説し、當時の貴族文學は彼等の實生活の表現に非ずして、單純なる擬古文學なり、然れども其末期の和歌にありては、却つて實生活の叫びあるを注意し、又第三章「文學の概観、下」(戰記文學)に於ては此時代の新しき文學なる戰記ものに就て論じ、戰記文學には政治的、道德的意義ありとし、其作者は多く僧徒にして、其文章は非寫實的に、且つ俯觀的の態度なりとし、宴曲及詞曲に言及し、第四章「政治思想の發達と樂觀主義」に於て、世の治亂は爲政者の徳不徳に職由するものとせし當時にありては悲觀主義の色彩を認むる能はずとし、第五章に於て「道德思想」万面にありては、文學に對しても道德眼を以て視んとする傾向ありとなし、武士を支配する根本問題は情にして、儒教及佛教思想は單に文字上の智識に過ぎず、實生活に影響する事少きも、しかも佛教的無常觀の當時人心の一隅に存在せし事は、因果的思想としてまた己むを得ざるべしと説き、動搖極まりなき時代の常として「超人間の力と殺伐の氣」(第六章)ありし外に「古典趣味」(第七章)のありし事は拒否すべからずとて、禪宗に伴うて輸入せられし「新來の支那趣味」を併せ叙す。第二編「武士文學の中期」は應安頃より文明頃に至る約百三十四年間とし、第一章「文化の大勢」には一種の武家貴族發生の新現象を説き、武家が公衆に代りて文化の中心